

文学の媒体(写本、印刷技術、メディア)

—『ラーマの行いの湖』の例で辿る写本から石版印刷本・活字本のへの移行—

坂田貞二(拓殖大学・名誉教授)

19世紀後半の北インドでは、文献を製作する方法が手書きから石版印刷および活字印刷へと移行しつつあった。この過程をトゥルスィーダースによる古代叙事詩『ラーマヤナ』の翻案 *Rām-carit-mānas* 『ラーム・チャリト・マーナス(ラーマの行いの湖)』(1574年に着手)の例で辿ると、つぎのようになる(下記の3点は、いずれも坂田蔵)。

- (1) *Rām-carit-mānas* (『ラーム・チャリト・マーナス』)。1869年完成の**原文写本**。縦27センチ×横20センチ、両面書き447葉(約890ページ)を綴じて本にしたもの。
- (2) *Śrī-rām-carit-mānas* (『聖ラーム・チャリト・マーナス』)。カーシー(現在のワーラーナシイー)の出版社・書店から1869年に刊行された**原文の石版刷り本**。縦29センチ×横23センチ、全468ページで多数の絵が挿入されている。
- (3) *Rāmāyaṇa Tulsīdās kṛt saṅgīk* (『トゥルスィーダース作のラーマヤナ、註釈付き』)。ラクナウーのナワル・キショール社から1888年に刊行された**活字印刷**で、**原文に註釈と現代語訳**が添えられている。縦18センチ×横37センチの貝葉型で両面印刷。1,438ページが綴じてないため、貝葉写本の形を保っている。

これらが製作された時期は、1857年におきたインド大反乱が1859年に鎮定され、インドがイギリス帝国の直接支配下に置かれたことに伴い、法令や学校教科書を印刷する技術が急速に広まってきたときにあたる。

上掲(1)の手書き本(写本)と(2)の石版刷り本が同じ1869年に造られ、(3)の活字本がその19年後の1888年に出版されていることからわかるように、手書きからさまざまな印刷へと移行するなかで、技法が並行・並存していたことも窺える。宗教書や娯楽書のなかには、活字が定着した1900年に石版刷りで出版されたものもある。

なおCDやDVDが普及している今日、『ラーム・チャリト・マーナス』の電子版は売れ筋になっている。